



財団法人日本医療機能評価機構認定病院
DPC 特定病院群
地域医療支援病院
地域がん診療連携拠点病院
臨床研修指定病院

ふれあい



撮影：島岡 理

【もくじ】

2020 年度初めにあって
ハラスメント防止対策委員会の立ち上げにあたって

脳卒中ケアユニット (SCU)

ハイブリット手術室の工事にあって
臨床研修医の 2 年を終えて
私の仕事 (保安員)
編集後記

副院長・医療安全管理部長 大浦 裕之・・・3

副院長 菊池 貴彦・・・4、5

7 東主任看護師 田村 ひろみ・・・4、5

中央手術部長・麻酔科長 下田 栄彦・・・6

令和元年度臨床研修修了研修医 15 名・・・7

保安専門員 佐藤 敏・・・8

広報委員長 (小児外科長) 島岡 理・・・8

院長 宮田 剛・・・2

【行動指針】

1. 良質な医療の提供
2. 次世代医療人の育成
3. 地域医療への貢献
4. 救急医療の充実
5. 災害医療の体制整備
6. 健全で効率的な病院運営
7. 魅力ある職場環境整備

基本理念

高度急性期医療を推進する県民に信頼される親切であたたかい病院

※広報誌「ふれあい」は 1,800 部を作成し、県民、連携医療機関、行政機関等に岩手県立中央病院の情報をお届けしています。

「2020 年度初めにあって」

院長 宮田 剛

新型コロナウイルス感染症蔓延防止のために年度末の送別会、年度初めの歓迎会が自粛され、気持ちの切り替えに苦労する春となりましたが、皆様お元気でお過ごしでしょうか。

他国での爆発的な COVID-19 流行に比して、クルーズ船問題があったにも関わらず、日本での患者数増加が少なく経過し、その後の東京などでの感染爆発などが起こっていますが、今のところ岩手県での発症がない（4/14 日現在）済んでいるのは、県民の良識ある行動のなせる業という論評がありました。集合型イベントの自粛や、休校に対する対応など、反対意見もありながらも全体としては、感染拡大阻止に向けて県民が協調した行動をとっているように見えます。多少の買い占め騒ぎがありましたが大きなパニックにもならず、PCR 検査の乱用もなく、緊急事態宣言は首都圏を中心に発令されましたが、中国のような物理的封鎖などという強制力は必要とせずに、国民が粛々と対応しています。手洗いの重要性も強調されたことで季節性のインフルエンザ発症が減ったとも解釈されていること、マスクの意義についての議論も為されたこと、風邪症状の自己管理としての安易な病院受診が見直されるようになったことなども意義があったと感じます。医療者側も検査だけでない病歴の大切さ、投薬だけではなく安静や栄養などの重要性を見直さざるを得なかったのではないのでしょうか。ICT による医療の普及、テレビ会議などの普及など個人的には、患者 - 医療者のあり方に良い変化をもたらした機会と言える部分もあったと思います。国民皆保険でフリーアクセスが担保されている我が国ではありますが、今回の教訓を活かした健康の自己管理意識と適正受診の普及で、岩手県の医療が一段階成熟し、レベルアップすると確信しました。まだ長期戦が予想される COVID-19 問題ではありますが、今年度も引き続き岩手県立中央病院をどうぞよろしくお願いいたします。



ハラスメント防止対策委員会の立ち上げにあたって

副院長・医療安全管理部長 大浦 裕之



この4月に当院に発足した「ハラスメント防止対策委員会」の初代委員長を仰せつかりました大浦です。専門は呼吸器外科で、主に肺癌等の悪性疾患に対する手術治療を担っております。この委員会が立ち上がる契機になったのは、昨年8月に宮田院長より「今年の宮田プロジェクトは職場ハラスメント防止対策一本でいきます。そのチームリーダーをお願いします。」と言われたことでした。ここで改めて「大病院の職場ハラスメント問題」を現実的に考えることになりました。同時期に全職員に対してパワーハラスメントおよびセクシュアルハラスメントアンケートが施行されましたが、各部署でハラスメント行為が少なからず発生しており喫緊の防止対策が急務と感じました。当院は多忙を極める、生死に直結した高度急性期病院であり、日々緊張を強いられる上にプロ意識の高い多職種専門家集団が共存するという特殊性も相まって、ハラスメントが生じやすい環境であることは現状として認識しています。しかしながらハラスメントは人権侵害にかかわる問題であり、個人の尊厳を傷つけるとともに被害職員が心身の健康を害して休職や離職を余儀なくされる事態を招きます。さらに業務の効率化を阻害する要因となり病院にも多大な損害を与えます。加えて医療現場での人間関係の悪化は医療安全上重大な問題にもなるのです。

ハラスメント防止対策プロジェクトの発足を様々な会議体で周知し、昨年12月に全職員対象の「本気でハラスメント対策!! 院内研修会」を開催しました。その冒頭で宮田院長より力強い「ハラスメント根絶宣言」がありました。私もプロジェクトリーダーとしてハラスメント防止対策の院内体制と相談対応フローを早急に構築することを約束いたしました。その後、ハラスメント相談員を中心に委員会立ち上げのワーキンググループを結成し、医療界より一歩先んじている一般企業のハラスメント対策を参考にしながら当院向けに改変したハラスメント防止対策委員会規約、相談窓口や調査会の各設置要綱、相談者の対応フローの作成に取り掛かりました。折しも、昨年5月に参院本会議で「ハラスメント防止法」が可決となり今年6月から法律が施行されますが、何とか当院でも体制作りが間に合い安堵している所です。このような経緯でプロジェクト発足が委員会の立ち上げに繋がりました。この体制づくりをきっかけに働きやすい職場環境を職員一丸となって実現していく所存です。ご指導いただきました宮田先生を始め、ご協力いただきました関係各部署の皆様にご心より感謝申し上げます。

※ ハラスメント (harassment) とはいろいろな場面での『嫌がらせ、いじめ』のこと。その種類は様々で、他者に対する発言・行動等が「本人の意図には関係なく」、相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えることを指す。

ハイブリッド手術室の工事にあたって

中央手術部長・麻酔科長 下田栄彦



近年、外科手術と血管内治療を組み合わせたハイブリッド手術が注目されています。中央病院でもハイブリッド手術室の設置工事が始まりました。ハイブリッド手術室とは、透視装置およびX線透過が可能な手術台またはカテーテルテーブルを手術室に設置するものであり、従来、別々に行われていた外科手術と血管内治療を同時に行うことが可能になります。ガイドラインでは、面積が60㎡以上あること、class II以上の空気清浄度、人工心肺装置や経食道エコー検査が可能なスペース確保、設置型透視装置の設置、透視装置用の操作室の設置など、細かな条件が求められています。当院では、日常診療（手術も含む）への影響を最小限にとどめながら、既存の手術室を改修・拡張する工事が進んでいます。

麻酔科、心臓血管外科、循環器内科、脳神経外科、整形外科、放射線科など関係する診療部門ならびに看護部門、放射線部門、臨床工学部門などによるチームを結成し、管財部門を加えて、機種選定に向けて動き出しました。

経カテーテル的大動脈弁留置術 transcatheter aortic valve implantation(TAVI) や大血管手術、脳血管や脊椎領域におけるハイブリッド手術の有用性も高まっています。

2019年、当麻酔科は4,430例を管理しました。ハイブリッド手術室ができることによって、血管造影室（手術室外）で管理した全身麻酔（2019年は76例）を手術室内で麻酔管理することが可能になります。また、関係診療科においては、整った環境・設備の元で血管内治療ができることが期待されます。多くの診療科で使用するハイブリッド手術室です。互いに協力し合い、譲り合い、ルールを守りながら、有効活用するべきであると考えます。

2022年2月完成予定のハイブリッド手術室を最大限に活用するため、各診療科・各部門と協力のもと、高度で安全な医療を提供できるように院内の運用方法を模索しています。



振り返ってみると充実した研修生活を送ることができたと実感できます。当初の目標は「基本的な診療を身につける」ことでしたが、症例数の多い当院の研修制度のおかげで学ぶことができました。今後は整形外科医として人々の役に立てればと思います。

佐々木 一真

初期研修2年間で入院病棟や救急外来での診療を経験させて頂き、大きく成長できたと思います。進路も決まり今後も当院で後期研修をすることになりました。研鑽を積んで参りたいと思います。

滝川 浩平

2年間でたくさんのご指導を頂きました。指導医の先生方や患者さんをはじめ、院内すべての方々に支えていただいたお陰だと思っています。ありがとうございました。来年度からも引き続きよろしくお願い致します。

大山 綾音

中央病院での2年間はとても濃密で多くのことを経験させて頂きました。ご丁寧にご指導くださり大変感謝しています。新天地でも全力でがんばります。

窪野 裕太

臨床研修医の2年間を終えて



尊敬できる恩師や高めあえる同期に恵まれ大変充実した2年間を過ごすことができました。さんさ踊りや院内コンサート出演を通じてメディカルの方々や患者様と関わることができたこともいい思い出です。今後の医師人生に生かしていきたいと思っています。2年間大変お世話になりました。

村上千裕

右も左も分からない中、当院の皆様本当に優しくご指導頂きとてもありがたいと思っています。来年度からは消化器内科医師として、社会の役に立てよう頑張りたいと思います。

大坂 龍也

指導してくださった先生方、中央病院で出会った患者様とご家族の皆様、多くの人に支えられお世話になり充実した研修生活を送ることができました。来年からも岩手に残り医療に貢献していきたいと思っています。

玉懸 直人

医師としてはじめの一步を岩手でできて良かったです。あたたかくご指導いただきありがとうございました。来年からは仙台で呼吸器内科医として働きます。また機会がございましたら何卒よろしくお願いいたします。

鳴海 茜

この2年間で、医師としても大きく成長することができました。今後はレジデントとして責任を負いながら働くこととなりますが、初期研修で学んだことを忘れず、更なる努力を積んで実力を付けていこうと思います。

薄田 海

2年間の研修で多くの科をまわり、たくさんのご指導を学びました。来年度からは岩手の産婦人科を支えていけるよう頑張っていきたいです。

吉田 光法

素晴らしい同期、先生方に囲まれて無事2年間を過ごすことができました。ありがとうございました！

水沼 萌

医師としても社会人としても1年目の自分でしたが、指導医、メディカルの方々、そして何より患者様に育てていただき、少しはまともな医師に近づけたと思います。4月からは外科医として当院で修練を積んでいくので引き続きよろしくお願いをします。

出川 和希

皆様に支えられ、大変有意義な研修生活を送ることができました。感謝申し上げます。大切な仲間と共にこれからも努力して参りますので、御指導、御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。

阿部 桃子

周りの皆さんの支えのおかげで充実した研修ができました。ありがとうございました。

伏見 佑香

研修が始まった時は右も左もわからない状態でしたが先生方のご指導のおかげでどうにか研修を修了することができました。当院での経験を生かして来年以降も頑張っていきます。

北村 佑樹

私の仕事

保安専門員 佐藤 敏

私は、中央病院で保安専門員として保安の仕事をしています。日頃、総合案内付近を中心として働いており、今回、機会を頂いたので仕事の一端を紹介します。病院の行動指針の一つに「良質な医療の提供」が掲げられていますが、良質な医療を提供しようとする医師、看護師、職員等に暴言や暴力、脅迫等の犯罪が行われるような事があったのでは実現が難しくなります。そのため、院内の秩序を維持するため私の仕事があり、事案があった場合には私に対応にあたります。しかし、常にその様な事が起きているわけではありませんから、普段は、患者さん方の案内、再来受付、自動精算時の機械のお手伝い、車椅子の準備など、身近にある仕事をしながら備えています。仕事の中で困ることは、医療の専門的な事を聞かれること。医療への不満を言われることが困りますが、分からない事は分からない、答えられない事は答えられない、駄目な事は駄目とはっきり告げることが心掛けています。

編 集 後 記



大変な事になってきましたね。COVID19。本県では幸いにも現時点で陽性者は出ていないのですが、巷ではPCRをきちんと行っていないんじゃないかとか、隠蔽してるのではとか、コロナ蔓延防止に日々努力する人たちを愚弄するような勝手放題の人達もいるようですね。そういうコメントを目にすると腹がたってしまいます。さてコロナ治療体制についてですが、あくまでも私個人の私見として、センター的な病院でコロナを治療し始めると、コロナ以外の治療が必要な重症患者にとって集約的治療を行うのに多大な影響をもたらす兼ねないのではないのでしょうか。

癌化学療法、臓器移植後などの免疫低下状態の患者さんなど大変だと思います。また医療関係者がコロナ感染者とそれ以外の患者を同時進行的に診察加療することは、院内感染などの危険性が高まるという懸念もあります。むしろ感染症指定病院などを一時的にコロナ治療病院に特化して、医療スタッフが足りないときには大病院から期間を区切って派遣する仕組みを構築することで、重症コロナ感染症に最適な治療を行いながらかつ蔓延しないようにし、建物丸ごとの隔離体制をとるのがよいのではないかと思います。そうする事でコロナ感染者のみならず、コロナ感染者以外の重症患者さんの診療の質も保たれるのではと思います。ただそのためには首長などからのトップダウン等で迅速に対策を立て迅速に動く必要がありますよね、きっと。いずれこの未曾有の事態克服をめざして迅速性が要求されます。

お知らせ

★健康講座について★

新型コロナウイルス感染拡大防止のためしばらくの間、開催を見合わせます。



岩手県立中央病院
〒020-0066 岩手県盛岡市上田 1-4-1
TEL:019-653-1151 FAX:019-653-2528
<http://www.chuo-hp.jp>

ふれあい No.288 令和2年4月
岩手県立中央病院 広報委員会

◆委員長 島岡 理

相馬 淳	吉田 学
吉川 和寛	城戸 直人
高橋 大輔	佐々木 貴美子
埜中 由美	坪井 ふみ子
高江柄 万喜子	岩渕 ひろ絵
藤原 由樹	菅野 冬桜子
日當 光紀	吉田 奈穂子

ふれあいはホームページでもご覧頂けます。

岩手県立中央病院 検索

脳卒中ケアユニット (SCU)

脳卒中ケアユニット (SCU) の状況

副院長、脳神経センター長 菊池 貴彦



当院では岩手県内で最初の脳卒中ケアユニット (SCU) を 2019 年 8 月に開設し、運用してきています。

SCU は急性期の脳卒中患者に、専門の医療職が組織的・計画的に急性期医療・リハビリテーションを行う専門病床です。脳神経外科または脳神経内科の経験を 5 年以上有する常勤の医師が常に (24 時間・365 日) 院内にいて、患者 3 人に対し 1 人のナースが配置されていること、CT・MRI・脳血管造影

などの脳画像診断が 24 時間可能なこと、専任の理学療法士または作業療法士が 1 名以上いることなどの厳しい要件を満たすことが求められています。

以前から当院では脳神経外科と脳神経内科で脳神経センターを構成し、24 時間・365 日体制で脳卒中の診療にあたってきました。毎年 500 例程度の脳梗塞、300 例程度の脳出血・くも膜下出血の患者さんが入院しています。血管内治療の専門医 5 名 (脳神経外科 3 名、脳神経内科 2 名) を有し、急性期脳梗塞に対する血栓溶解療法 (t-PA 治療) は年に 70 例、血栓回収療法は年に 100 例を超え東北でも有数の症例数となっています。SCU は常に血栓回収療法後の患者さんや脳出血の患者さんで病床利用率 100% の状況です。患者さんにとっては集中的な治療、管理、リハビリテーションが受けられ、病院経営上も医療管理加算によって増収となり、双方にとってメリットのある SCU ですが、看護師不足が常態化している当院ではさらなる増床は容易なことではありません。一般病床や高度治療室 (HCU) と SCU を使い分けながら、今後も岩手の脳卒中治療に貢献して行きたいと考えています。



SCU 開設から 1 年

7 東 主任看護師 田村 ひろみ

SCU (Stroke Care Unit) は脳卒中の急性期に対する治療を行う集中治療室です。脳卒中治療ガイドラインでは、SCU の効果として、死亡率や再発率の低下、入院期間の短縮、自宅退院率の増加、長期的な日常生活動作と室の改善が報告されています。

県内初の当院の SCU は、2019 年 8 月に 3 床で開設され、脳出血、血腫除去術後の患者さんが 30%、脳梗塞 (血栓回収やアルテプラザーゼ静注療法後) の患者さんが 70% となっています。病床利用率は常に 100% であり、医師、看護師、専任の理学療法士が中心となり専門性の高い医療を提供しています。

複合した疾患を持つ患者さんが多いため、看護師は、最先端の治療が行われた後の治療効果と合併症を注意深く観察し、多職種のスタッフと連携を取りながら、社会復帰に向けて積極的に回復支援 (早期離床、経口摂取、栄養面の改善) に力を入れています。

当初は、緊急度、重症度の高い緊急入院の患者さんの受け入れや病床を適切に運用することに皆精一杯でした。しかし、失った機能を取り戻そうとリハビリに励む患者さんとそのご家族と共に回復への一歩を進めている時、私たちは前向きな気持ちになりやりがいを実感しています。SCU の看護スタッフが大切にしていることは、患者さんご家族の気持ちを受け止めること、一人一人の回復過程に丁寧に寄り添うこと、安心できる関係性を作るため笑顔を大切にする事です。

今後も、医師や多職種とのチーム医療を推進しながら、早期回復を目指して地域の病院につなげ、自宅へ戻れるように、患者さんやご家族に寄り添った専門性の高い看護を実践していけるよう頑張っていきたいと思っています。